

VII-26

歴史的な河畔空間の保全に向けて

東北大学○正会員 松山 正 将 東北大学 正会員 花 洵 健 一  
東北大学 正会員 菊 地 清 文 東北大学 正会員 佐 伯 吉 勝

1：はじめに

『豊かな自然環境や歴史的環境は、私達ひとり一人の人格形成に大切であり、このような環境を備える「まち」の潜在的教育力は、次世代の「まち」の担い手を育み、環境への深い慕いと保全への行為に価値を見出す人格を育てる』と言われている。現在著者等は、このような空間保全とまちづくりに関する環境資源の掘り起こしと情報づくりに取り組んでいる。本報告は、このような環境資源の現況調査を通して得られた情報の中から、歴史的な河畔空間に関する知見について述べるものである。

2：調査対象地域

仙台市の市街地を流れる広瀬川は仙台城があった青葉山丘陵と並んで杜の都のシンボルであり、都市の中の稀少な自然として市民生活にとって精神的・文化的に大切な役割を果たしている空間である。調査対象地域は藩政期の絵図を参考に、市街地沿いの牛越橋付近～愛宕橋辺りに至る約6.8kmの区間である。

3：調査方法

文献調査としては、藩政期から明治、大正、昭和40年代までの絵図と地形図に基づいて、流路変化に伴う蛇行州形状、架橋位置、護岸工作物の有無などの検討を行った。また、洪水年表等を参考に被害状況と橋架け換え時期の確認と、藩政期の御修復帳による橋の規模・構造寸法等の確認を行った。

現地調査はこれら事前の文献調査資料を参考に、市街地沿いの河原・河床・堤防などの踏査と現況写真記録を行った。特に藩政期の架橋位置調査については、河床に泥岩層が露出している事から橋杭（橋脚）穿孔跡の搜索を主として行い、必要に応じて現地測量を実地して現況の詳細把握に努めた。

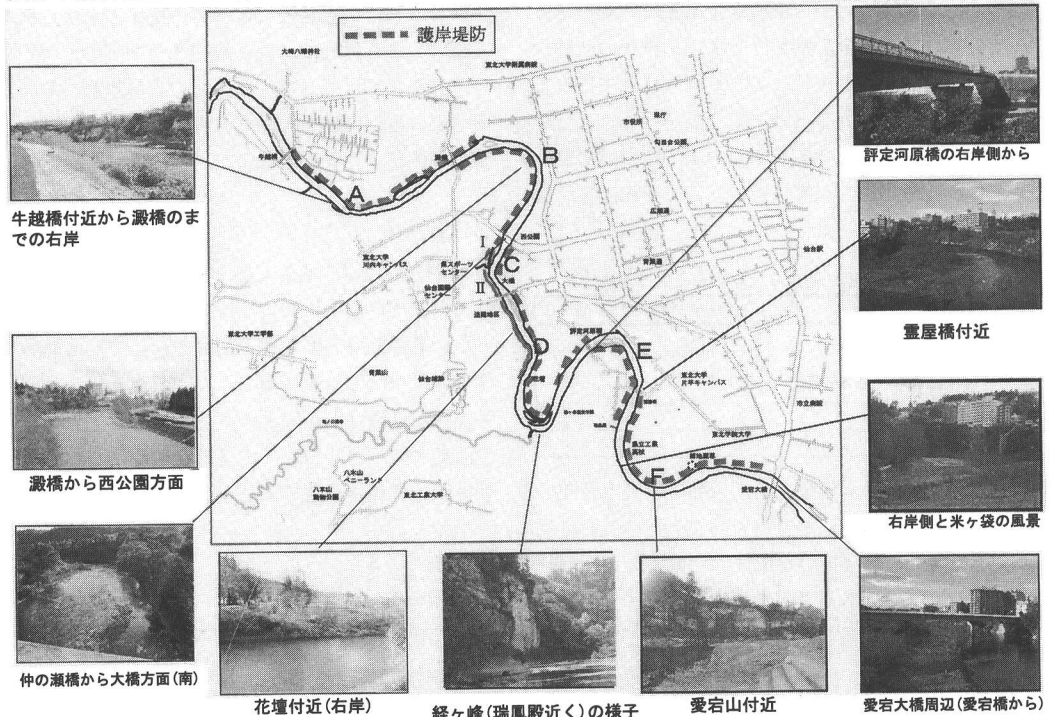


図-1 調査対象地域

#### 4：調査結果

現地調査からは、河岸段丘崖を有効に活用して護岸堤防を設けていることが確認でき、兩岸ともこの護岸工事や橋の架け換え工事等で地形改変が進んでいると判断された。しかし、仲の瀬橋から大橋そして経ヶ峰にいたる右岸側の状況は、護岸も蛇籠や石積程度で地形改変が少なく、水辺にも容易に近づくことができる親水性の高い空間で、貴重な藩政期の景観を残しているものと推測された。

図－2は藩政期末作成された絵図で、当時の橋の位置を○印で示した。架橋位置調査の事例として、仲の瀬橋の状況について述べる。

藩政期の仲の瀬橋は、名前の示す通り流れの蛇行によってできた州が大きくなった瀬を中継地として、大小二つの橋があった。

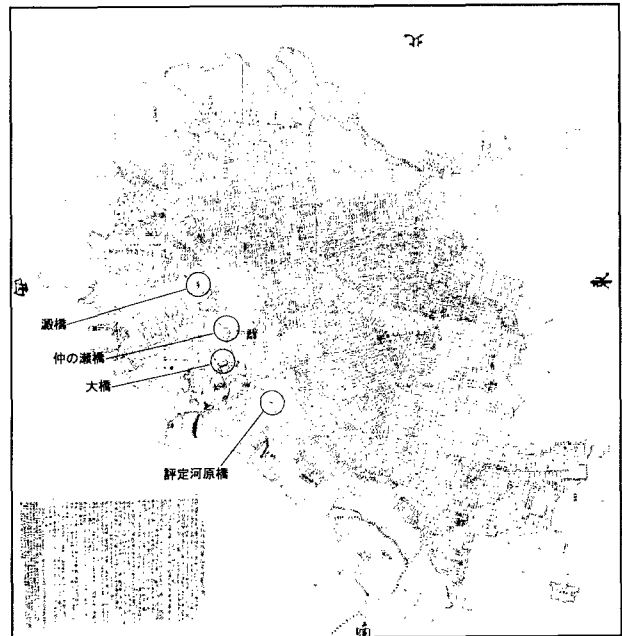
仲の瀬によって流れは二分され、東側は中の町下、西側は大工町の岸に沿って流れていたようである。

現地の河床調査では、図－3に示すような穿孔跡を見付けることができた。穿孔跡の直径は約25cmで、深さは40cm～100cm程度であった。穿孔跡の間隔と位置について測量を行い、現況地形との位置関係を確認した。現況地形図と藩政期の絵図の比較から、流路に大きな変化があることから、仲の瀬橋に関わる穿孔跡なのか判断はできない。

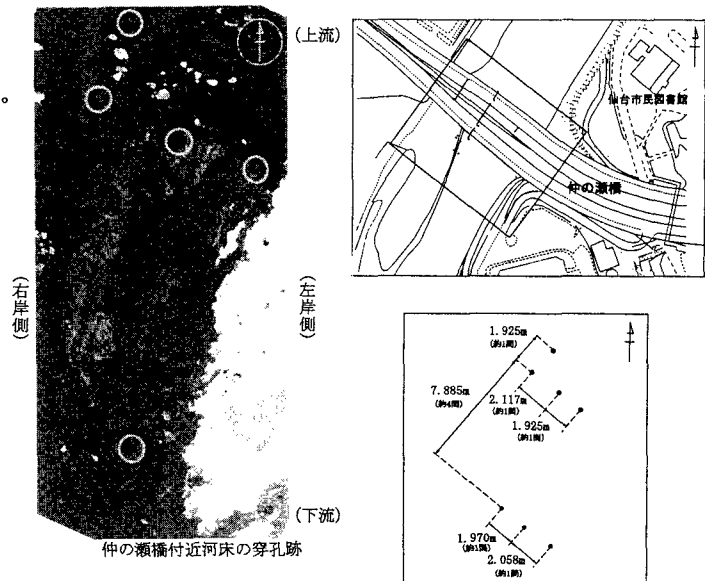
#### 5：おわりに

本調査から、広瀬川に残る歴史的河畔空間としては、地形改変が最も少なくかつ青葉山丘陵を借景として、豊かな自然景観が残されている「仲の瀬橋から大橋そして経ヶ峰にいたる右岸地域」を指摘しておきたい。今後も質の高い環境の教育力を信じて、調査と情報づくりを継続したい。

なおこの調査は、当環境測量研究室の2000（平成12）年度卒業研修生實石伸子、2001（平成13）年度卒業研修生平野佑馬両君の協力を得て行われたことを付記し、あわせて謝意を表する。



図－2 安政補正改革仙府絵図(1856年-1859年)



図－3 仲の瀬橋付近の河床の穿孔跡